



渡辺 悠生 (わたなべ ゆい) 第八小 6 年生

作品名：盲導犬の一生から学び感じたこと

図 書：光をくれた犬たち 盲導犬の一生

この本を読むまでは、盲導犬の一生がどんなものか想像した事もなかった。一般的に家で飼われている家庭犬は子犬の頃から老犬になり、一生を終えるまでの間、比較的自由でのびのびとした生活を送っている。しかし、盲導犬候補の犬は、生後二ヶ月からパピーウォーカーの元で様々なトレーニングを受け、その一年後に訓練所に戻り、そこで訓練を積み重ね、晴れて盲導犬となったら十才になるまでの長い月日を、ユーザーの目の代わりとなってユーザーと共に生きていく。家庭犬が味わう事の無い責任感や緊張感をいだって過ごしていく。同じ「犬」として生まれてきても、家庭犬と盲導犬では、こんなにも生き方が違う事におどろいた。

しかし、盲導犬のおかげで、歩く事への不安や恐怖が減り、充実した生活を送る事ができるようになる視覚障がい者がある。盲導犬と一緒に歩く事で、視覚障がい者だと周りが気づいてくれ、よけてくれたり声をかけてもらいやすくなるというメリットもある。盲導犬と共に過ごす事で、本来はあきらめざるを得ない夢を実現させる事ができる人もいる。真っ暗な世界に光がさすようなのだろう。

盲導犬は例え自分が通れても、ユーザーが通れない道はばや障害物がある時は、「ゴー」と指示されても進まない。人間の私でも判断が難しく、失敗してしまうかもしれない。このような難しい判断を盲導犬は自分自身で行う事ができる。それは、子犬の頃から訓練所でたくさんのトレーニングを重ねてきたからである。盲導犬との歩行は、犬と人間がたがいにコミュニケーションを取り合って進む共同作業なのである。

盲導犬の仕事は「角」「段差」「障害物」の三つを、立ち止まってユーザーにきちんと教える事であり、その立ち止まる行いが何を意味しているかをユーザーが判断し、頭の中でえがいた地図をたどって目的地まで行く。盲導犬との歩行は「指示を出す人間」と「指示を受け歩行を導く犬」との共同作業なのである。実際に盲導犬を連れて歩く視覚障がい者を見た事があるが、犬が目的地まで道案内をしてくれていると思っていたがそうではない事を知る事ができた。今後、見かける事があったら、盲導犬の動きに注意したい。そして、勇気を出して「何

か手伝える事はありませんか。」などと声をかけてみたいと思った。

盲導犬は、初めの約一年間をパピーウォーカーのもとで過ごし人間と居る事が大好きな犬に育つ。十才となり盲導犬を引退した後は引退犬ボランティアのもとで過ごし、一生を終える。引退犬を引き受けるのは、その犬が子犬の頃、パピーウォーカーとして預かっていた人が引き受ける事が多いそうだ。はなれていた期間が長く、盲導犬という大きな責任を背負って生きてきたため、再び家族のきずなを作るのには時間がかかるそうだ。しかし、引退犬ボランティアの愛情をたっぷり受け、ゆっくり心を開いていき、甘えたり、はしゃいだりふつうの家庭犬のように戻っていく。何の責任も負わず幸せに暮らし、命を全うしていく。

このように、一頭の盲導犬が、一生を終えるまでには、たくさんの人達が関わっているという事が分かった。パピーウォーカー、訓練士、ユーザー、引退犬ボランティア、盲導犬の一生が充実し、幸せであり、素晴らしいものになるには、どの人の力も欠けてはならないと思った。

世の中は盲導犬を受け入れられないし設やかん境が数多く存在している。もっと私達一人一人が盲導犬に興味を持ち、理解する事で変えていける気がする。そうなれば、だれもが暮らしやすい優しい社会ができていくのだと思う。